

前表中には普通の積戻品を包含し、其額は時局前の十四年上半年期に於ても、四十餘萬圓を占むるから、純伸繼貿易額は、十四年には約六百萬圓、十五年には約七百萬圓と見積らば、大過なかるべきである。而して同貿易の最も發達したのは、十四年十月以降から十五年の三月迄である。其後は毎月四、五十萬圓臺であつたが、省港罷工事件の終熄せる十五年十一月以後激減したのは、恐らく普通の積戻品に屬するもの、みとなつたのであらう。十二月には十八萬圓臺に下り、本年(十六年)上半期に於て總額僅かに二十餘萬圓に減退したのも、亦同一事情である。

前記特殊伸繼貿易の系統は、凡そ(第一)は廣東を仕出地とするもので、(イ)香港を仕向地とするもの、(ロ)外國を仕向地とするもの、又は支那を仕向地とするものがあり、(第二)は香港を仕出地とするもので、(イ)廣東又は其他支那諸港を仕向地とするもの、(ロ)外國を仕向地とするものがあり、(第三)は外國を仕出地とするもので、(イ)廣東其他支那諸港を仕向地とするもの、(ロ)香港を仕向地とするものがあるが、最も重要な部は、左表の如く(第一)の(イ)及(第二)の(イ)中廣東を仕向地とするものである。

基隆港部

廣東 仕出	一六七、四三二 ^円	一、二一九、〇四八 ^円
香港 仕出	四、六九三、二五三	四、一五八、八四七
廣東 仕向		
外國 仕向		

香港 仕出	八六〇、四〇二	九二二、三八八
廣東 仕出		
香港 仕向	二一五、八六〇	六九、一六七
外國 仕向		

前記貿易を時局其他發生の原因から分類せば、下の通りである。

		(大正十五年)		(大正十四年)	
		昭和元年		昭和元年	
仕出地	仕向地	金額	金額	金額	金額
廣東	香港	六、二八六、六一二 ^円	五、七二一、〇八七 ^円		
外國	廣東				
汕頭	香港				
香港	外國	六九、一六七 ^円			
香港	支那	一七二、〇五〇 ^円	一二五、三六二 ^円		
外國	上海部	二四四、〇〇九 ^円	一五三、六四二 ^円		

五、船舶遭難其他荷役不能等により持越したるものさ再び積戻したるもの、價額

基隆—支那及外國 一四、七二四

香港—支那及外國 三二八、四九九

六、普通積戻

廣東—支那 九、九七、三〇四
 外國—上海一部 九、九七、三〇四
 上海—支那 九、九七、三〇四
 保倉—支那及外國 九、九七、三〇四
 其他—其他 九、九七、三〇四

廣東—支那 四、七六、三六七
 外國—上海東部 四、七六、三六七
 汕頭—香港 四、七六、三六七
 上海—支那 四、七六、三六七
 保倉—支那及外國 四、七六、三六七
 其他—其他 四、七六、三六七

前記貿易中、重要品を掲ぐれば、左表の如くである。

仕出地	仕向地	(單位千圓)	
		大正十四年	大正十五年(昭和元年)
煙草	廣東—香港	一五四	一五〇
	廣東—外國	三六	二一九
藥材	廣東—外國	一九五	三三七
	其他	六三五	九四
絹及絹織	廣東—外國	三、〇一五	一、五七三
	其他	三、六五〇	一、六六七
紙類	廣東—香港	二二六	—
	廣東—外國	三六	—
鐵材	廣東—香港	一八四	二九三
	其他	三三	—
籐	廣東—香港	一五〇	二九三
	其他	三三	—
蒲類	廣東—香港	一八四	二九三
	其他	三三	—
計	計	七二五	一四八
	計	一、一三二	一、一三二

仕出地	仕向地	(單位千圓)	
		大正十四年	大正十五年(昭和元年)
絹及絹織	廣東—外國	一五〇	二九三
	其他	三三	—
紙類	廣東—香港	二二六	—
	廣東—外國	三六	—
鐵材	廣東—香港	一八四	二九三
	其他	三三	—
籐	廣東—香港	一五〇	二九三
	其他	三三	—
蒲類	廣東—香港	一八四	二九三
	其他	三三	—
計	計	七二五	一四八
	計	一、一三二	一、一三二

高雄は獨り十四年に、廣東を仕出地とし、香港及外國を仕向地としたもの僅かに三十萬七千餘圓、及外國を仕出地とし、香港を仕向地としたもの五萬五千餘圓があつたのみである。

第六年(昭和二年)對支貿易の趨勢

本年の對支貿易は、内地同様臺灣財界の不況及支那動亂の影響を受けたる以外、夏期七月以降の排日運動に依つて打撃を受け、一方排英經濟絶交終熄の結果、香港仲繼に復歸し、廣東に對する貿易が絶無となり、或は激減し、貿易の系統を轉換したことは、注意すべき現象である。通商地別に對して前半期中の南支の例を見るに、輸出は、福州以外は何れも前年に比して減退し、殊に廣東に對しては、前年の二百八十六萬圓が百六十八萬圓臺に下つた。反之只香港に對しては、主として廣東需要の石炭が香港に仕向けられた爲め、前年の二百十萬圓が二百五十八萬五千圓に上つた。輸入は、上海・廈門・福州に對しては前年に比して多少増進を示したが、汕頭に對しては前年の五十萬七千圓が三十三萬二千圓に、廣東は十四萬五千圓が二萬一千圓に、香港は四百一十一萬八千圓が三百八十一萬七千圓に減退したのである。

更らに對支貿易の約七割内外を占むる基隆の本年十月迄での実績を見るに、輸出は、年初から九月迄で、前年に比して各月共減退し、八月の如きは二分の一以下となり、總額は前年の一千九百七萬圓が一千五百九十三萬八千圓に下つた。輸入も、年初より三月及六月を除くの外、各月共に減退

し、總額は前年の三百四十四萬圓が三百九萬圓に下つて居る。

一方戎克貿易は、輸入は、主として財界の不況に依り、年初以來三月を除くの外、各月共減退したが、輸出は、一月を除きなば、汽船貿易の如く排日貨の影響を受けぬばかりでなく、却つて一部汽船貿易の缺を補充した傾向があり、十箇月間の總額は、前年の六十四萬九千圓が九十八萬七千圓に増進した。更らに通商地別に見るときは、輸出に於て戎克貿易の盛であつた福州・温州以外は、廈門・汕頭・上海・廣東等何れも不振にして、廈門は一月以降四月迄で、前年に比して各月共減退し、六月末から九月初旬に亘り排日貨があり、殊に八月の如きは、之れが爲めに著しく反響を蒙り、前年の六十四萬九千圓が一萬三千圓に激減した。汕頭は二月には前年の五十七萬六千圓が二十萬九千圓に、六月は四十五萬圓が二十三萬圓に下り、殊に八月の如きは前年の四十五萬七千圓が僅かに二萬六千圓に、九月には五十七萬六千圓が十二萬二千圓に激減した。上海に對しては、年初以來一月、六月及九月を除きなば、各月共減退し、殊に七月の如きは前年の二十九萬圓が七萬九千圓に激減した。廣東に對しては、各月共最も減退が甚しく、就中五月には前年の五十五萬一千圓が十萬一千圓に、六月は三十九萬圓が十八萬圓に、八月は十四萬六千圓が七萬九千圓に、九月は二十二萬八千圓が九萬二千圓に、十月は三十三萬六千圓が十萬圓に減退したのである。反之其他位を恢復した香港に對しては、三月を除きなば各月共増進を示し、殊に排日貨のあつた七月には、前年の十一萬二千圓が

約五倍して五十二萬六千圓に、九月には十萬九千圓が三十五萬三千圓に激増した。今一月以降十箇月間に於ける、基隆港の廣東及香港に對する重要品の輸出を對照すれば、下表の通りである。

品名、仕向地	昭和二年		大正十五年		増減	
	數量	價額	數量	價額	數量	價額
石炭	一三、四一〇噸	一三、一一一	二二、七〇六噸	二、二六八	△九、五九六噸	△九、五七〇
棉織物	二九、一〇〇噸	一、六三四	六、一七〇噸	七、〇	△六、三九〇噸	△八、五九〇
錫	三、四八〇噸	一	一、九六〇噸	五、〇	△八、九二〇噸	△
乾魚	五、六二七斤	二〇七	五、三三〇斤	一、五	△三、〇八八斤	△
乾鹹魚	一、七四〇斤	一、五	四、二八六斤	一、三	△二、五四六斤	△
絹及絹織物	一、七四〇斤	一、五	三、四三五斤	六	△一、七〇五斤	△
			二、二八六斤	二〇	△一、五七三斤	△
			一、八三三斤	三	△一、八三三斤	△

大連・天津其他支那諸港に對しては、何れも多く減退した。

次に輸入は、厦門は三月・五月及九月を除きなば、毎月減退し、汕頭は一月・三月及七月を除きなば、各月共減退し、殊に八月の如きは、前年の三萬七千圓が四千圓に下り、福州・温州及上海等は多

く増進し、廣東は輸出の場合と同じく甚しく減退し、一月・二月・五月及八月の如きは、全然杜絶した。大連・天津其他は又何れも前年に比して減退したのである。以上述べたるが如き情況であるから、基隆港十箇月間の支那及關東州・香港等に對する輸出入額の對照を示さば、左表の如き結果となる。

(單位千圓)

地名	十五年一月以降十月迄		昭和二年一月以降十月迄	
	輸出	輸入	輸出	輸入
厦門	六、四六二	四四六	六、三七七	四〇一
汕頭	四、〇七四	四一七	二、九三八	二七九
福州	一、八七〇	三三〇	三、一〇四	三四九
温州	一、五七	三四五	二、五九	三七八
上海	一、九六〇	一、五一七	一、三二六	一、五五四
廣東	三、一三〇	一、三六	一、五二八	一〇
天津	九六	一五二	八二	九四
其他	一、三二〇	一〇五	三二七	二七
支那計	一九、〇七〇	三、四四九	一五、九四〇	三、〇九二
關東	八七	七、〇九八	一一五	六、六八〇
香港	一、五九二	一、五一四	三、〇二七	一、七六五
合計	二〇、七四九	一、二、〇六一	一九、〇八二	一、一、四二二

前表に依れば、對支貿易は約一割五分減で、前年の二千二百五十萬圓が一千九百萬圓に下り、關東州及香港を加算せば、約二割三分減で、前年の三千九百九十萬圓が三千萬圓臺に下つたのであるが、支那諸港に對しては、十月以降は反動的に漸く好況を呈するに至つた。今年(昭和二年)十一月及十二月間も、同一事情の下に増進を來すことは明かである。

第六章 中南支に於ける各國の商勢力の比較と我對支貿易の振興策

第一 在支各國人の人口及商社と商勢力

各國の對支商勢力の比較を試みるには、貿易額以外に、投資高・人口・商社等の數、港灣及海陸連絡の設備、租界又は租借地の廣狹等、諸種參酌すべき條件があるが、最も能く商勢力に對する「バロメーター」となるものは、貿易額及入出港船舶の數量又は噸量である。而して或る國の貿易額と云ふも、各自國船に依る直接貿易額を原則として擧げるが、尙他國船に依る自國貨物、又は他國人の取扱に依る自國貨物、或は支那に在る自國工場の生産品もあり、是等貨物の系統を數字的に分類することは、困難の事業であるが、直接貿易以外に間接貿易として、又閑却することの出來ぬものである。支那全體として投資額・人口・商社並に貿易高に就ては、北支・滿洲を包含するを以て、日本は列國の首位に在る。投資額は紐育外交協會の調査に依れば、各國は米貨二十億乃至二十五億弗であり、日本を主とし、英國は次位に在るとし(香港を除く)、米國の對支投資は、商業に七千萬弗、文化事業(學校・教會・病院等)に八千萬弗とする。又他の調査に依れば、米は一億三千八百萬弗乃至一億五千萬弗として居る。日本は日清戰爭後漸く三十年に過ぎぬ短期間で、滿洲に對する投資額は、

滿鐵又は朝鮮銀行等の調査を參酌すれば、二十億圓の戦費を別とし、公私經濟上の投資額は、恐らく十五億圓に達すべし。北支は少額に止り、例へば天津は三、四千萬圓、青島は八、九千萬圓臺の投資に過ぎず、獨り上海は、紡績工業を主とし、諸工業又は航運業の中心地である爲め、邦人經營の港灣其他諸設備も比較的多く、三億圓以上の投資がある。其他長江筋に在つては、漢口に四、五千萬圓の投資を見るの外、特筆すべきものがなく、殊に南支諸港に至つては、其施設極めて貧弱であり、自ら投資額の如き、頗る少額に止るものと認めらる。反之英國は南京條約以來、香港を土臺とし、南支沿岸諸港に多年商業上の經營施設に怠りなく、廣東・梧州・汕頭・廈門等に對しても、恰も香港の分港に對するが如く、商勢力を扶植し來たのである。香港を含めば、英國の對支投資額は七億磅と稱せられ、各地沿海沿江の市場には、英國の香上銀行や大古・怡和洋行等關係の建築物が輪奐の美を盡し、人目を惹いて居る。先年香港大學の教授ミッドルトン・スミス氏は、其著書中に、「怡和洋行なしには、東洋を想像することは殆んど不可能事であり、又王家の如くに特權を得た該洋行が、一度其聲位を失墜せんか、吾人は東洋生活の樂を破壊するに至る」と云ふて居るが、是れ英國の商勢力の偉大を如實に物語つたものである。

人口及商社數に於ては、又日本は滿洲を含めるを以て、著しく優勢である。人口に於て主要開港地中、長江方面にては蘇州・南京・蕪湖・九江・長沙・重慶・成都等を除き、南支にては廣東・西江諸港を除きなば、日本人が第一位を占めて居る。商社も英・米等と異り、殊に一九一五年頃から、雜貨店其他小商人迄でも計上してある爲め、優勢であるが、商勢力の比較には頗る權衡を失するのである。左に人口及商社數の國別増進情況を示す。

(海關調査)

國別	一九一八年		一九一七年		一九二二年		一九二四年		一九二五年		一九二六年	
	商社	人口	商社	人口	商社	人口	商社	人口	商社	人口	商社	人口
英	三九六	五、一四八	六五五	八、四七九	七五五	一、一八五	七六	一、四七〇	七八	一、五二七	七四	一、四六〇
米	三三	二、〇五六	二六	五、六八	三七七	九、一五三	四七〇	八、八一七	四八二	九、八四四	五二〇	九、四〇一
日	二四	一、六九八	一八八	一、四四九	三九〇	一、五二八	四二八	一、九二〇	四七〇	二、一八三	四四六	二、三三九
佛	三三	五、九	二七	二、二二二	三九	二、三〇〇	二五五	二、七五	一七六	二、五七六	一九二	三、一七〇
獨	一〇七	六、四八	—	—	一八四	一、九八六	二五三	二、七三	三八	三、〇五〇	三二	二、九三三
蘭	二〇	六、〇	五二	二、二九七	一九七	三、五五	一三二	三、六五七	一七四	三、七三九	一七七	三、二六
露	一六	一、三三	二九四	五、三二〇	一、四二	六、七三四	九三四	八、五七六	九三	七、九七五	六九	七、四〇八
其	三六	二、五四	一、二七四	六、〇七	三六	四、三九	二二九	四、三三	二二五	四、二四九	五七	三、八五五
計	七三三	一、三三二	七〇五	二、〇四五	七〇二	二、八二九	七二六	三、〇八二	七三三	三、六八四	七五七	三、四八

最近(一九二五年十二月末現在)外人々口を領事館の調査に依り、各地に分ちなば、北支は滿洲と同じく日本を主とし、天津・青島・濟南及芝罘の四地に於て、外人の七千六百七十九人に對し、日

本人は青島の一萬三千餘人を含むから、二萬二千四百二十四人に達し、上海は外人二萬五千二百九十八人にして、其中日本人は二萬八百三十一人(鮮人七百九十六名、臺灣人五百二十五名を含む)なるに對し、英人は三千六百四十二人、米人は一千二十二人に過ぎぬ。露人は革命後、白系の避難民が増加した爲め、一九二〇年頃は六千人内外に達したが、四千九百餘人に下り、又最近は八、九千人に上ると云はる。長江沿岸の成都・重慶・宜昌・長沙・沙市・漢口・九江・蕪湖・南京・蘇州及杭州を合計すれば、外國人の人口は五千五百二十五人にして、其中日本人は三千四百四十四人(鮮人百五十六人、臺灣人三十一人を含む)なるに對し、英・米人は各一千八百餘人に過ぎぬ。南支の福州・廈門・汕頭及廣東の四港に在つては、外人の一萬三千二百三十七人中、日本人は九千四百十人(鮮人三千四人、臺灣人八千八百八十四人を含む)を占めて居る。本年(一九二七年)の時局動亂に依り、諸外國人は著しく減退を來したので、従前の比例を採用することは出来ぬのである。

商社數に於ても、凡そ人口數に比例し、例へば上海に在つては、一九一四年頃は英國の二百三三、米國の七十一に對し、日本は百十七を占め、一九一九年には、英の二百二十一、米の百三十五に對し、日本は好景氣時代であり、小商店をも加算して居るから、千三百六十三に達したが、一九二一年には、英の二百六十六、米の二百十六に對し、九百八十四に下つたのである。

南支の福州・廈門・汕頭及廣東等は、何れも三井物産及郵・商船等の二、三汽船會社或は臺灣銀行及正金銀行等の支店出張所又は代理店を數ふるに過ぎぬ。其他は小商人で、福州・廈門の如きは、臺灣人經營の雜貨商・料理屋・飲食店・阿片商等多數に上り、就中臺灣籍民の多數に居住する廈門では、營業者七百四十七戸(十五年九月現在)中、阿片商は最高の百九十五戸を占め、雜貨商は百六十八戸、料理店は九十戸に達して居る。反之外國商人は其數少きも、商勢力としては優勢なものがある。例へば福州に於ては、一箇年の輸出高三百五十萬弗内外を占むる茶の如きは、多年主として英國商の取扱に係り、近年其輸出高の多きものは、英商の Harrison King, Jardine Matheson, Bathgate, Dodwell 等の外、獨商の Siemssen & Krohn 等である。汕頭は廈門及福州に比して貿易高も多く、一九二六年の内外貿易額は八千五百萬兩、外國貿易高は三千六十萬兩で、邦貨の四千八百萬圓に達するが、邦商三十六の取扱高は、僅かに五「パーセント」の二百餘萬圓に過ぎぬ。而して約半額を取扱ふ三井物産に屬するものを除かば、一萬圓乃至五萬圓のものが數軒あるのみで、其他は何れも一層少額の營業人である。其他大部は英・米等の外商及支那人の經營に屬するもので、殊に近年は支那人の勢力が増進し、又當地支那人は、廈門・福州等の例と異り、神戸・上海又は香港等に出張し、直接買出に従事しつゝある。

廣東に於いて英國人は、約十年前迄で人口に於ても、外人々口の約三十二「パーセント」にあたる四百八人を占め、米人も三百六十七人に達したが、日本人は二百七十六人(少數の臺灣籍民を含む)

に過ぎぬ。商社も英國は三十四の五〇「パーセント」を占め、頗る活躍して居たが、日本商の活動は、極めて微々たるものであつた。而して英・米・佛・獨等の外國商館は、何れも創立以來二十年乃至五、六十年を経過し、總輸出高の約五割乃至七割を占むる生絲の如きは、大部英・佛商人の取扱に係り、例へば戦前の一九一三、四年期には、總額五萬六千餘袋中、英國(五社)は二萬袋、佛國(四社)は一萬九千二百餘袋、獨逸(二社)は一萬七百餘袋であつたが、日本(三井)は僅かに二千九百餘袋に過ぎぬ。戦後の一九一九、二〇年期には、總額六萬六千二百餘袋中、佛國(七社)は巨擘で二萬七千餘袋、英國(四社)は一萬七千六百餘袋、米國(三社)は九千九百餘袋であつたが、之に對して日本(三井)は増進したるも尙五千餘袋に過ぎぬのである。一商社で五千袋以上取扱ふたものは、英商の T. E. Griffith Reiss、佛商の Boyer Mazet, Gerin Drivard、米商の General Silk Importing Co. 及三井物産會社等であつた。最近の一九二六、七年期には、生絲の輸出總額は、減退して四萬三千五百五十四袋となり、英國の勢力は失墜し、佛國が優勢となつて約半額を占めた。例へば佛商の Madier Prere の如きは、一萬五千餘擔を取扱つた。而して日本は依然振はず、三井物産及日本生絲の兩社を合算して漸く七千七百餘擔に達した。屑絲に就ても、總額三萬三百餘袋中、佛商の Gerin Drivard の如きは、一萬二千六百袋を占め、其他米國の五千九百袋に對し、日本は三井及日本生絲兩社で一千三百四袋に過ぎぬことゝなつた。

最近廣東に於いては排英抵制の結果、英國が其商勢力を漸次失墜し來つたのに對し、獨商は從前の七社が十三社に増加し、其活躍には見るべきものがある。即ち染料・毛織物・電氣機械・寫眞・文房具・燐寸・麥酒等を以て英・米・日等に對抗し、取引高は一千五百萬元以上に達して居る。日本商中主たるものは、十五、六あるが、直接取引高は三井物産の六、七百萬圓を筆頭とし、總額は二千五百萬圓内外に達したるも、總貿易高の一割弱に過ぎないのである。

第二 貿易及航運と商勢力

輸出入貿易額及入出港船舶の多寡は、更らに商勢力の比較上、重要視すべきものであるが、各港の國別貿易額は公刊の海關報告に掲載せられないから、上海・福州・廈門及汕頭の外は、稅收に依つて研究することにしたので、多少出入のあることは已むを得ない。

國別貿易額並に船舶の入出港に就ては、前に各港貿易の部に於て説明したが、茲に更らに綜合比較することにする。總對支貿易高の國別比較に就ては、一九一八年及一九二六年日本が首位に上り、英國を凌駕し、稅收に至つては、一九一七以降一九一九年迄及一九二五年及一九二六年は、日本が又英國の上にあることは、前に述べた通りである。船舶の入出港に就ては、英國は優勢で、即ち噸數に於て一九二四年は三九、三九「パーセント」、一九二五年は三二、五〇「パーセント」、一九二六年は三五、三八「パーセント」なるに對し、日本船は次位で、各二四、五八「パーセント」、二

七、三六「パーセント」及二八、九三「パーセント」となり、支那船は各二三、五四「パーセント」、二五、七四「パーセント」及二一、〇九「パーセント」となり、米船は各年四「パーセント」以上五「パーセント」以下に過ぎぬのである。

地方別に考察するときは、稅收は一九二五年北支(大連・天津及青島)及上海を除くの外、南支の福州・厦門・汕頭及廣東に於いて、英の三九「パーセント」、支那の二五「パーセント」に對し、日本は二三「パーセント」となり、長江地方及上海以外の中支十四港に於て、英及支那の各三三「パーセント」なるに對し、日本が二〇「パーセント」であることも、亦已に述べた如くである。船舶の噸數に於ては、北支では英の一六「パーセント」、支那の一「パーセント」に對し、日本は六〇「パーセント」を占めたが、上海では英の三〇「パーセント」、支那の一九「パーセント」、米の一〇「パーセント」に對し、日本は二二「パーセント」を占め、南支の同上四港では英の三〇「パーセント」に對し、日本は一八「パーセント」となり、長江及中支十四港では英の四〇「パーセント」、支那の三五「パーセント」、米の二四「パーセント」に對し、日本は更に低下して二二「パーセント」に過ぎぬ。

次で一九二六年に於ける前記稅收及船舶入出港隻數並に噸量の國別對照表を掲ぐれば、下の如くに増減がある。

(一) 北支十三關

(愛琿・哈爾濱屬關・琿春・延吉・安東(含大東溝)・牛莊・秦皇島・大連・天津・膠州・龍口・芝罘) 稅收及船舶

(註) () 内の數字は大連・天津・膠州三關の計數とす。

國名	課稅		船舶	
	稅金	%	隻數	噸數
日本	一三、〇四八	(五、一、六)	一〇、四二五	一一三、五五六
支那	四、八三七	(一、九、一)	一七、四五二	四、五三九
英國	三、五七九	(一、四、二)	三、五三二	五、九一五
米國	三、〇六六	(一、六、五)	一、七二〇	(三、四二九)
其他	六〇七	(三、一、四)	三二八	一、三八八
計	二五、二八五	(一、〇、〇)	三三、二八七	二九、四九六
	(一八、六一四)	(九、三、七)	(一三、三二七)	(二〇、九二二)

(二) 上海同上

國名	課稅		船舶	
	稅金	%	隻數	噸數
英國	一〇、四〇五	(三、一、〇)	五、五三四	一〇、九五二
支那	三、一七三	(九、六)	九、九二三	五、二一五

國名	課税		船隻		噸數	
	金	%	隻數	噸數	隻數	%
計	三三、六三〇		二二、六八六	三三、三二三		一〇〇、〇
日本	一〇、五二四	三二、〇	四、五八四	九、三八二		二〇、八
支那	三、五〇三	一六、七	一、一九七	三、五九三		一〇、〇
其他						

(三) (長江・南支・北支別) 同上

長江等十四關 (重慶・宜昌・長沙・沙市・岳州・漢口・九江・蕪湖・金陵・鎮江・蘇州・杭州・寧波・萬縣)

國名	課税		船隻		噸數	
	金	%	隻數	噸數	隻數	%
計	一一、二二〇	一〇〇、〇	六六、一三二	五二、三六七	一〇〇、〇	一〇〇、〇
英國	三、九二三	三四、九	二二、二五三	二四、七六八	三三、六	四七、三
支那	二、八八四	二五、七	二六、六五五	一一、九七一	四〇、三	二四、八
日本	二、五一九	二二、五	一一、四九〇	一一、三三九	一七、四	二二、六
其他	七四二	六、六	三、二九一	一、〇五一	五、〇	二二、〇

(四) 南支及西江十五關 (南寧・梧州・九龍・廣九鐵路・拱北・瓊州・北海・江門)

(註) () 内は福州・厦門・汕頭・廣東四關の計數とす。

國名	課税		船隻		噸數	
	金	%	隻數	噸數	隻數	%
計	九、三三六	一〇〇、〇	四五、九七三	一九、九五三	一〇〇、〇	一〇〇、〇
支那	三、三二六	三九、六	三三、三八一	六、三二九	六三、九	三二、七
日本	二、四四一	二九、八	四、六七八	三、五〇九	三六、四	二二、五
英國	一、三三一	一四、〇	五、一五五	六、〇〇九	一一、二	三〇、一
其他	二、一〇四	二二、三	三、一九六	五、一五二	二四、九	一三、五

表中 ×印は九龍及拱北二關に於ける税金の國別資料なきため、船舶の噸數に依り按分算定せるものとす。

前表に依れば、北支では、日本は稅收・船舶噸數共に六〇「パーセント」内外を占め、之れに對して英は僅かに一六「パーセント」に過ぎぬが、上海に於ける稅收は、日本は英國に對して稍多く、三二「パーセント」を占めたが、船舶噸數は、反對に英國の三三「パーセント」に對して二八「パーセント」に下り、長江等十四關に於ける稅收は、英の三四、九「パーセント」に對して二二、五「パーセント」、

船舶噸數は、英國の四七、三「パーセント」に對して二三、六「パーセント」に過ぎぬ。南支及西江十五關に於ける稅收は、日本は英國を超過し、英國の一四「パーセント」に對し、二六、一「パーセント」を占めて居たが、船舶噸數に於ては減退し、英國の三〇、一「パーセント」に對して一七、五「パーセント」に下り、就中福州・廈門・汕頭及廣東の四港に於ける稅收は、日本は英の一三、三「パーセント」に對して三〇、六「パーセント」を占めたのである。船、船舶噸數に於ては英に劣り、英の三五、七「パーセント」に對して二一、七「パーセント」を占むるに過ぎないのである。更らに對支商勢力上、重大な關係を有する支那沿海貿易を見るに、日本船は英國船に比して著しく遜色があり、殊に上海以下南支諸港に出入する日本船は、臺灣を根據とする大阪商船會社の所屬船、山下汽船及上海廣東航路の日清汽船等を合算するも、南支定期船は十隻内外に過ぎぬが、英國系の船舶は、西江方面を除外するも大古・怡和・ドーグラス・印度支那汽船會社等で、凡そ二十有餘隻に上るから、沿海貿易船の入出港及沿海貿易額に於ては、彼我間に著しく軒輊する處がある。

今最近五箇年間に於ける英・米・日・支の沿海通航船舶噸數並に内外貿易額の對照表を掲ぐれば、左の通りである。

年次	英國		米	
	沿海貿易船 入出港噸數	外國貿易 百分率	沿海貿易 百分率	外國貿易 百分率
一九二二年	三五、九一四	三七、八〇%	一、四五九	七、一六%
一九二三年	三七、五一五	三六、八六%	二、一九〇	七、六〇%
一九二四年	三九、一三三	三四、四二%	二、一四四	七、八八%
一九二五年	三〇、三八九	二五、八〇%	一、九四九	九、二七%
一九二六年	三六、四六一	二五、〇二%	二、〇五五	八、五四%

年次	日本		支那	
	沿海貿易船 入出港噸數	外國貿易 百分率	沿海貿易 百分率	外國貿易 百分率
一九二二年	二〇、七〇七	三二、九二%	二七、六九三	一〇、三八%
一九二三年	二〇、一四六	三三、六〇%	二七、九八六	九、七〇%
一九二四年	二〇、八三八	三三、六四%	二八、三〇七	九、五九%
一九二五年	二〇、四五六	三九、六二%	二九、六六六	七、五〇%
一九二六年	二三、五九四	四二、五八%	二六、六八三	四、九二%

即ち英國は、上海・廣東事件前には對支勢力に偉大な力を持ち、沿海貿易は四二、三「パーセント」を占めて居たが、同事件の發生した一九二五年以後は、三〇「パーセント」内外に激減し、日本は從前英國の三分の一以下に位して居たが、~~一九二六年~~一九二六年は漸く二二、八四「パーセント」に達した。但し尙英國には遠く及ばないのである。又支那は從前英國と大差なかつたが、一九二五年に英國の

二倍以上の四五、六〇「パーセント」を占めたことは、注目すべき現象である。米國も近年漸次増進し、一九二四年には最高の二、四三「パーセント」に達したが、**昨年**一九二六年は稍減退して一、五七「パーセント」に下つた。其他獨逸の増進は著しいものがあり、「パーセンテージ」は一九二四年に〇、〇一「パーセント」が一九二五年には〇、一〇「パーセント」、一九二六年には〇、二七「パーセント」に達し、又沿海船の入出港数は、一九二四年の三百隻一千百三十一萬噸が、一九二四年には三百四十五隻一千三百九十四噸、一九二六年には四百八十八隻千七百十三噸に上つたのである。

支那貿易の半數に近き、上海に於ける内外貿易汽船入出港の比較を示さば、左の通りである。

(海關日報から計算した上海英國商業會議所の一九二六年六月報に依る)

年次	英國		米國	
	航洋船噸數百分率	沿海船噸數百分率	航洋船噸數百分率	沿海船噸數百分率
一九二三年	三一、二七%	三九、九八%	二一、〇五%	一、八〇%
一九二四年	三二、八七%	三九、三六%	二〇、〇七%	一、四一%
一九二五年	二九、〇五%	三二、五八%	一九、九一%	一、四八%
一九二六年	二七、五六%	三七、九八%	二一、九四%	一、七五%

年次	日本		支那	
	航洋船噸數百分率	沿海船噸數百分率	航洋船噸數百分率	沿海船噸數百分率
一九二三年	三二、八八%	二〇、二八%	—	—
一九二四年	二九、五七%	一九、四四%	—	—
一九二五年	三四、一三%	一九、三二%	—	—
一九二六年	三四、四六%	二一、一九%	〇、一四%	—

(註) 一九二六年上海入出港航洋汽船噸數は一千七百三十萬四千六百七十六噸、沿海貿易汽船噸數は一千六百六十二萬七千七百九十噸とす。

即ち航洋汽船に在つては、時局の影響に依り、日本は英國を踰越し、沿海汽船に於ては、英國は減退し、日本は増進したが、尙英國の壘を摩すことは出来ぬ。米國は航洋汽船及沿海汽船共、一九二三年に最高記録を呈したが、其後減退し、**昨年**一九二六年は又増進した。支那船は時局に依り、一九二五年には増加したが、一九二六年は招商局汽船が軍事に徴發され、又は廢航した爲め、減退したのである。

本年(一九二七年)一月以降九月迄の上海入出港各國船の比例を掲げば、左の如くである。

國別	總噸數	沿海貿易船噸數	航洋汽船噸數
英	九三、三九八	二、九七〇	四、七九三
米	三〇、八六三	一、一七五	二、九〇七
日	七、八七四	一、七七一	四、四三二
支	四、七九七	一、一五五	一、九九四

(同上月報に依る)

即ち日本船は、總噸數に於ては英國に比して稍多く、沿海船は英國に對して其差額が少くなつたのである。

上海入出港の獨逸船は、一九二三年頃から激増して同年には五十萬噸を越へ、一九二四年には七十五萬噸、一九二五年には八十四萬噸、一九二六年には九十一萬餘噸に上り、本邦一九二七年は九月迄に既に八十萬五千噸に達した。尙十九二十年に於ける沿海貿易船は二百九十萬噸で、十七五「パーセント」を占め、約米國と同じく第五位であり（米は二百九十一萬噸）、航洋船は六十二萬噸で、十六「パーセント」を占め、佛に次ぎて第五位に上つた。

次に上海及南支諸港の貿易額を見るに、上海最近四箇年間の國別歩合は下の如くである。

	一九二三年	一九二四年	一九二五年	一九二六年
英	四三、〇%	三四、〇%	二九、五%	三二、一%
米	一四、〇%	二四、〇%	二四、八%	二三、六%
日	一四、〇%	二〇、〇%	二〇、四%	一八、二%

即ち日本は、時局前の一九二三年には英の四分の一に達せなかつたが、一九二四年及一九二五年には共に増進して二四「パーセント」臺に上つた。又稅收は英國に比して多額を占むるが、貿易高は英國に比して遙かに低位に在る。

福州・厦門及汕頭三港に於ける、最近三箇年間の國別貿易額を對照すれば、左表の如くである。

州	米		日		英		計	一九二四年	一九二五年	一九二六年
	輸	入	輸	入	輸	入				
福州	輸	入	輸	入	輸	入	四、八二九	四、二六八	五、八三三	
	輸	入	輸	入	輸	入	三、六三〇	三、一〇六	四、二〇〇	
	輸	入	輸	入	輸	入	一、三六五	一、一七五	一、五四一	
	輸	入	輸	入	輸	入	四、九七〇	四、六〇五	四、七二五	
	輸	入	輸	入	輸	入	一、三三四	一、〇二七	九三五	
	輸	入	輸	入	輸	入	四一	一五五	一六〇	
厦門	輸	入	輸	入	輸	入	八、六三八	八、六一六	九、二六六	
	輸	入	輸	入	輸	入	二、五九四	三、一六一	三、四二四	
	輸	入	輸	入	輸	入	二、五七七	三、四三九	四、七四八	
	輸	入	輸	入	輸	入	二六三	二四五	三八四	
	輸	入	輸	入	輸	入	一、三二二	八七〇	一、二六一	
	輸	入	輸	入	輸	入	四〇七	四三七	四〇七	
汕頭	輸	入	輸	入	輸	入	二〇、九六〇	二二、七八二	六、六二二	
	輸	入	輸	入	輸	入	七、三七二	五、七一二	五、六〇〇	
	輸	入	輸	入	輸	入	一、二六九	一、二一一	三、五〇六	
	輸	入	輸	入	輸	入	二六五	一九〇	二六九	
	輸	入	輸	入	輸	入	一、六六九	一、四〇一	七七二	
	輸	入	輸	入	輸	入	三六三	五八二	三一二	

(單位千圓)

第六章 中南支に於ける各國の商勢力の比較と我對支貿易の振興策

計港三		日		英	
米	日	米	日	米	日
輸出	輸入	輸出	輸入	輸出	輸入
八一	四、三一五	五、四九八	五、二一一	一三、五九六	二四、四二七
五、一二六	一〇、七〇九	一〇、七〇九	一〇、七〇九	三九、〇二三	二五、六六六
九〇四	二、六六九	五、〇三七	五、八二五	一一、九七九	二五、六六六
三、五七三	一〇、八六二	一〇、八六二	一〇、八六二	三七、六四五	一五、〇九九
一、八三三	七、五〇〇	七、五〇〇	七、五〇〇	一三、二二四	二八、三三三
八七九	五、三七八	五、三七八	五、三七八	一一、九二八	一一、九二八
二、七二二	一、八三三	一、八三三	一、八三三		

即ち三港の合計に於ては、時局前の一九二四年には、英の六割餘に對して日本は一割六、七分に過ぎなかつたが、時局の影響に依り、英は減退せしが、日本は増進し、一九二六年には英の五割臺に對して日本は三割五、六分を占むるに至り、米は一九二四年の六、七分が一九二六年には五分内外に減退したのである。三港中汕頭は、香港の商勢力下に在る關係上、從來其貿易の大部は英國が之れを占めたが、排英抵制に依つて最も打撃を受けた。曩に排日貨運動熾盛であつた一九二〇年當時は、汕頭の外國貿易高二千五百萬兩中、英國は約七割四分を占め、香港のみでも約半額に近い數を示した。之れに對して日本は僅かに七十萬兩臺の二、四「パーセント」のみであつたが、一九一四年には漸く百五十萬兩となり、一九二五年には稍減退して百四十萬圓となり、一九二六年には三百七十萬兩に激増し、一二、三「パーセント」を占むるに至つたのである。

廈門の貿易も時局前の一九二四年には、日本は英の四分の一に過ぎなかつたが、一九二六年には英の五割六分に對して二割二分を占むるに至つた。

廣東貿易は、廣東が省港事件の中心地である關係上、最も著しき變化を來し、殊に英國貿易の激減に對して日本貿易の激増を見たことは、屢次述べた通りである。

廣東に對する日本の貿易は、汕頭と同じく、従前は極めて微々たるもので、例へば戦前の一九一八年には、外國貿易額七千八百餘萬兩中、英國は約四割三分の三千三百九十萬兩を占めたが、日本は僅かに六厘の五十三萬兩を占めたに過ぎなかつたのである（輸入二十七萬八千兩、輸出二十五萬二千兩）。之れは當時日本の直接貿易としては、獨り高雄・廣東線に大阪商船會社の蘇州丸及一船少數の臨時船が配されたのみであつた爲めである。但し同年輸入の日本品中には、前記廣東直輸入の外、廣東商人及日本人扱の香港輸入貨物約二千萬兩及其他上海輸入貨物三百餘萬兩合計二千三百餘萬兩があつた。其後は日清汽船・山下汽船等の上海及臺灣に對する航路の新設があり、直接貿易としても増加した。最近二箇年間の稅收及入出港船舶噸數を掲げば、下の如きものがある。

一九二五年船舶噸數(單位千噸)		一九二六年船舶噸數(單位千噸)	
稅收(單位千兩)	%	稅收(單位千兩)	%
英	一、三〇〇 (四三・〇)	三、一四九	四六四 (一〇・〇)
日	三三四 (一一・〇)	七六七	一、五八三 (三四・〇)
米	一〇二 (一一・〇)	六一	七〇
支	八〇〇 (二六・〇)	六三〇	一、二九五 (二八・〇)

其他	千兩 四六二	千兩 六〇六	千兩 一、二〇六	千兩 一、三五二
計	千兩 三、〇〇八	千兩 五、二二三	千兩 四、六一八	千兩 五、三二四
(外國貿易高)	千兩 一一二、四〇四	千兩 一一〇、〇〇〇	千兩 一一〇、〇〇〇	千兩 一一〇、〇〇〇

即一九二五年には、稅收に於て英國が従前と大差なく、約四割三分の百三十萬兩を占めたるに對し、日本は一割一分の七十六萬兩に過ぎなかつたが、一九二六年には時局の影響に依り、英が一割の四十六萬兩に激減したに對し、日本は増加して三割四分の百五十八萬兩に上つたのである。之を約五「パーセント」の稅額として貿易額に換算せば、一九二六年の例を採るときは、英の約九百萬兩に對して日本は三千百餘萬兩に達する。

如上、一九二六年の南支貿易は、英國が減退し、日本及支那側に増進を見たが、主として本年春からの動亂騷擾に依り、中支及長江地方は航通の阻碍甚しく、南支・香港方面は排英抵制終熄の結果、漸次舊態に恢復し、廣東貿易に對しては、英の増加に反して日本の減退せるは、最近の統計に見れば明かである。

本年(一九二七年)一月以降三箇月間、上海を除く長江沿岸十一港の輸出品五十有餘中、石炭・燃料・燐寸等二、三品の外は、何れも前年の同期に比して激減して居る。其顯著なるもの數種を擧ぐれば下の如くである。

一九二六年	自一月至三月	一九二七年	自一月至三月
-------	--------	-------	--------

棉布類(生・晒・染色及更紗)	一、三八〇、二二〇疋	八二三、四九〇疋
其他雜棉布	一九九、二八五碼	一三八、〇三七碼
棉花及棉絲	一七、七〇〇擔	九、八四七擔
綿毛交織布	三五五、〇一四碼	一〇二、二七四碼
砂糖	六六一、〇四七擔	四四二、九三八擔
煙草(卷)	六七三、四八七千本	四五六、〇六七千本
煙草(葉)	二二、六二三擔	四、四九〇擔

日本の對支貿易は、先に述べた通り、上海商務官の調査に依れば、昨年(一九二六年)十月以降本年六月迄での九箇月間に於て、日本品の輸出は、前年の同期に比して滿州北支は二割九分、長江方面は四割、香港及南支等は三分減とし、輸入は長江方面が一割一分、滿洲北支が二割六分、香港南支等が一割六分減として居るが如く、例へば現に廣東に對しては、邦船が本年一月より九月迄では、前年同期の百五十四隻十九萬六千餘噸に對し、五十九隻七萬四千餘噸に激減して居り、自ら本年六七・八の三月間に於ける日本の重要廣東輸入額は、下の如く減退して居る。

石	一九二六年	自八月至九月	一九二七年	自八月至九月
炭	一、二一三、六〇三兩	三七二、〇三〇兩		
セメント	一五一、四六二同	七二、八四七同		
貝	一五六、〇二一同	一七、一一一同		

錫	二八一、七七六兩	三三、五九五兩
棉布類	七一〇、二〇一兩	—

終りに本年(一九二七年)上半期の日本の支那及香港に對する重要輸出品に就て、前二箇年の同期に對照せば、下表の如く支那に對しては、砂糖及機械類を除くの外、三何れも減退し、香港に對しては恢復したるものもあることが明かである。

日本對支香輸出主要品三箇年對照表
附輸出貿易額

品名	支那		香港	
	元	年	元	年
綿織物	八二、九九〇	十四年	九、七二九	十四年
糖	九七、七八二	二年	九、〇一〇	二年
砂	五二、二〇二	二年	一三、九九〇	二年
綿織系	一一、一六八	十四年	—	—
糸	一一、〇七七	二年	—	—
糸	一三、三二二	二年	—	—
糸	一三、六一一	十四年	一一、三七五	十四年
糸	一六、七五四	二年	六、〇〇八	二年
糸	五、六八四	二年	二、四〇二	二年

(單位千圓)

品名	支那		香港	
	元	年	元	年
石炭	一一、七六四	十四年	三、一三四	十四年
紙	一一、〇八九	二年	一、五六六	二年
水産物	六、三九七	二年	二、三四一	二年
機械及同部分品	四、二九〇	十四年	六七五	十四年
木材	五、七〇三	二年	三六三	二年
鐵製品	五、三一	二年	五四三	二年
鐵製品	二、六六〇	十四年	四、〇九六	十四年
鐵製品	五、三三六	二年	二、〇三七	二年
鐵製品	一、八六八	二年	二、八三四	二年
鐵製品	二、三三六	十四年	三〇九	十四年
鐵製品	二、〇二三	二年	四九	二年
鐵製品	三、三〇五	二年	一一四	二年
鐵製品	三、〇六二	十四年	三八二	十四年
鐵製品	二、七七四	二年	六二	二年
鐵製品	一、七六三	二年	三六五	二年
鐵製品	一、七〇九	十四年	五〇九	十四年
鐵製品	二、〇五九	二年	二九四	二年
鐵製品	一、二三七	二年	六〇三	二年

噸		寸	
元年		元年	
十四年	一七九	十四年	一、四三八
二年	四八三	二年	一、一九四
	五五九		一、五六四
輸出總額		輸出總額	
元年		元年	
十四年	一九九、八六七	十四年	四二、九〇九
二年	二二八、四六四	二年	二四、八二八
	一五九、八四五		三二、三二二

第三 對支貿易振興策

日本の對支貿易は、前陳の如くに滿洲北支方面に在つては、優勢の地位を占め、自ら總貿易額に於て漸く英國を凌駕することになつたが、中南支地方に在つては、排英抵制の影響があつたにも拘らず、今日尙英國の後塵を拜して居る。固より中南支を通じ、英國は時局に依つて受けた創傷を短日に恢復することは困難であるが、本年（一九二七年）に及び、英國の香港廣東方面の通商は稍蘇生し、米國亦南北支那に亘り、商權の擴張に腐心し、殊に新興獨逸の活躍は、見るべきものがあり、今後支那市場に於ける角逐戦は、蓋し激烈なものあらん。其間我對支貿易の振興策は如何にすべきや、頗る重要な問題である。從來官民兩界各方面に於て論究され、畫策されたものがあり、何れも首肯し得べきも、其實行は容易でない。之れを對內的に觀察すれば、貿易の調査研究、金融機關の増設改善、港灣及海陸連絡の設備完成、港灣行政の統一、關稅制度の改訂等多々あるが、最も緊

喫なもの、築港事業の進捗である。例へば中南支貿易の増進に就ては、地理上又は人文上特殊の關係がある、臺灣當局の施設に俟つものが頗る多い。

現在基隆及高雄は、何れも二千萬圓内外の築港が出来て居り、尙擴張工事が捗進しつつあるが、ドックの如きは、基隆に僅かに二、三千噸級船舶の入渠に足るもの、一個を存するのみである。故に上海又は香港に對抗し、仲繼貿易を助長するには、先づ以て五千噸乃至一萬噸級船舶の入渠に足る「ドック」二、三個を、最短期間に築造することを要する。

又上海其他工業中心地が工潮に依り、近來頻々と脅嚇を蒙つて居るから、此際工業を選定して臺灣に移し、又は之を新設することも亦一妙案である。蓋し勞銀の如きは、上海及南支諸港は、革命亂中工會の簇發に依りて漸次昂騰し來り、自ら生活費も最近約五割を増加したのであるから、臺灣との差違が少いのである。

貿易助長の方針の一として、先年來臺灣自由港論がある、自由港と稱するも、其範圍を局限し、自由港區を基隆又は高雄に設置するは、保稅制度の擴張であつて、敢て徒事でないが、我邦の關稅制度は比較的發達し、最近又保稅倉庫・保稅工場法等改訂されたものがあり、自由地區の制度とは、程度の差があるに過ぎぬことゝなつたので、之れが設置に多大の費用を支出して迄でも計畫するは、策の得たるものではない、現に從來保稅倉庫並に仮置場等の設けがあつても、其他經濟上幾多の重要

原因が別に存するから、利用者少く、吾人の豫想する様に、加工貿易又は仲繼貿易の發達を見ないのである。

更らに一步を進め、臺灣全島の自由港説があるが、それは比較的廣大な香港・大連等の自由港をも超越し、寧ろ自由貿易國と同然で、關稅統一即ち我保護關稅制度を破壊し、之れに伴ふ臺灣統治上は勿論、財政上交通經濟上多くの支障弊害を伴ふ危険の主張である。要するに對支關係の上から、自由港制度の價値を考案すれば、支那貿易の漲落は、關稅の有無以上に金銀比價の昂低、動亂又は排外貨運動の崇りが、一層重大な原因を構成するものであつて、決して自由港買被り論者の夢想する様な結果を齎らすものではない、殷鑑遠からず關東州自由地帯の如きは、支那人と雖も容易に經營し得る簡易の豆油及豆粕製造の外、一般的に殆んど工業の發達を見ない、其主因は、支那市場に於ては現在尙概して生産費低廉の結果、關東州内に於て特に工業品を製造するの必要に迫られぬ爲である。

次に對外的には、南支方面に貿易商業に關する調査員を設置する件である。現在南支帝國領事官をして、臺灣總督府事務官を兼務せしめて居るが、我邦の領事は、本來の職務は固より通商航海に關し、所屬人民の利益を計ることに存し、所謂商業領事であるべきが、支那は領事裁判制度を存するが爲め、民事の裁判及其管轄内居留地の一般行政警察事項に従事し、對外交渉や實際に逐はれ、貿易經濟の調査などは思ひもよらぬ事、多くは時々必要に應じ、申譯的の報告を書記生に命じて

爲さしむるに過ぎぬ。又調査等に關して依頼を受くることは、最も好まざる風を順致して居るが、制度上の大缺陷であつて、領事其もの、能不能や賢愚の分るゝ所として非難することは當らぬのである。只今日の兼務制度は、少くとも貿易上秋毫の效果がないと云ふて憚りがない。故に既に輿論でもある通り、臺灣總督府が南支諸港に商務官乃至調査員を派出し、又は駐在せしめ、貿易經濟事情の根本的調査に従事せしむることは、機宜の處置である。或は在外商社員又は商人等を囑托せんとする意見もあるが、營利を主とするが爲め、事實の真相を報告せざる憾があり、亦實效がない。其他貿易助長手段として、南支諸港に於ける銀行業務の改善を計ると同時に倉庫・棧橋其他港灣及海陸連絡の設備を新設又は擴張することは、缺くべからざる事項である。現在は廣東の日清汽船會社及南洋倉庫又は厦門三井物産會社所屬の倉庫等の外、殆んど設備として見るべきものがなく、大阪商船會社の如きは、南支諸港を通じて一小蒸汽船すら持たぬ。之れに對して英國は、香港を中心として南北支那各港に完全な設備を存し、一汕頭の例に見るも、倉庫は大古洋行に百六棟六千坪、怡和洋行に四十七棟二千七百坪を有し、支那招商局に於ても二十四棟二千坪を有し、尙何れも之れに附屬した「ボンツーン」がある。貨物の取扱にも倉敷料の減免其他の便宜を計り、日本の船會社が顧客に對し、不誠實で冷淡であるのとは、著しく隔りがある。

只對支貿易上最も苦痛を感じて居ることは、支那の排日貨運動であることは茲に喋々を要せぬが、

由來排日運動は、明治四十一年の辰丸事件を發端とし、其後安奉線問題の四十二年、二十一箇條問題の大正四年、旅大回收問題の同八年、山東問題の同十二年、上海廣東事件の同十四年及滿洲問題の本年（昭和二年）に至る迄で、顯著なるものは七回に達して居るが、就中大正八年から九年に引繼いた排日貨運動は、南支厦門・汕頭等に及した通商上の打撃は、著しいものがあつた。例へば香港・基隆線の大阪商船會社積取貨物の數量を見るに、汕頭・厦門及基隆の三港を通じ、大正八年には前年の一萬四千噸が一萬四百噸に下り、九年には四千五百噸に激減し、八年六月以降及九年には汕頭・厦門共に殆んど絶無であり、汕頭は翌十年二月迄で同一情態であつた。又高雄・廣東線に於ても、八年は前年の六千餘噸に對して一千八百噸に下り、九年には二千七百噸となり、八年六月以降汕頭・厦門共に又入出荷を杜絶したのである。本年の排日貨は微少であつたが、厦門・汕頭共六月下旬から九月に及び、例へば基隆の輸出額が、厦門に對して八月は前年同期の六十四萬圓が一萬三千圓に下り、汕頭は四十五萬圓が二萬六千圓に減つた如くである。

排日運動の防止方法としては、所謂日支親善の口頭禪で推し通して來たが、その實效を擧ぐる妙計がないのを遺憾とする。殊に國民革命の反帝國主義運動が勃興した今日は、日本の國策に依つて影響を受け、日本が英國同様支那に歴史的利權を把持して居る以上は、慢性の惡疾と同じく、時々發作すべきは明な事實である。乃ち是等主要原因を拔本塞源的に艾除せぬ以上は、到底排外氣勢を鎮靜

することは不可能事である。

是に於てか將來吾人は、日本從來の對支政策を改め、専ら貿易商業本位に彼我の利益交換策に出づるより外、方法を發見せぬ。即ち専ら意を對支航運の助長發達を期することに注ぎ、將來長江及大連北支那諸港及南支廣東に對し、既に三線航路を開展して居る日清汽船會社、臺灣を中心として南支那航路を開拓して居る大阪商船會社を合體し、之れに郵船・山下・大連汽船等の從來より支那航業に緣故を有する二、三船會社を合同せしめ、南支に中心を置く大汽船會社を組織するに在る。之に依つて滿蒙の鐵道事業を生命とする滿洲鐵道會社に相對し、南北呼應して日本の商權を擴張し、支那海上の覇者となるのである。殊に陸上の企業と異り、支那側に對する利權の獲得から來る擊争問題に觸るゝ虞が少い會社の事業は、滿洲鐵道會社同様、政府殊に臺灣總督府の參加を要するのである。

從來日本の對支策は、北支那に偏し、南支方面に對する努力としては、見るに足るものがなく、自ら之れに關する智識は極めて貧弱であつた。一方英國は、前述の通り香港を踏臺となし、南支の商權を獨占し、汕頭・厦門方面から出る南洋に對する支那移民事業に干與し、移民の輸送及之れに關係ある物資の取扱に就ても、莫大の利益を享受し來つたのに反し、日本の航運業者は、南支沿海の是等事業に關しては、恰も越人秦人の肥瘠を見るが如く、日本對支那の航運ばかりでなく、支那各港間の航

運に活躍せんとするが如き、殆んど見出すことが出来なかつたのである。國家百年の長計から論ずれば、支那沿海航路の發達は、歐米航路のそれよりも層一層重要である。支那は云ふ迄でもなく、地大物博人口及土地は廣大で、産物の豊富なことは世界的のものがあるに、現在鐵道は米合衆國の三分の一以下にして、外國貿易は、全國にて昨年漸く二十億兩臺に近づき、内外貿易は二十六億兩を出たに過ぎぬ。但し昨年(一九二六年)の銀相場は低廉であるが、金貨に換算すれば、外國貿易に於て邦貨約三十億圓、内外貿易に於て約四十億圓を占め、尙實際支那海關の貿易統許は、海關員の言明に依れば、實際の市價よりも輸入に於ては二、三割、輸出に於ては五、六割以上低く見積つてあると云ふから、前記貿易額を内論に計算し、三割を加算せば、約日本と同額に達するのである。更に面積や人口の比例にせば、將來支那貿易の増進は著しきものがあるべく、其潜勢力の偉大なることは、今日之を實現しつゝある。我邦は遠大の對支策を立て、就中南支方面に對する商勢力の擴張に就ては、官民共臺灣中心の航運業の重要性を認め、之れが發達に努力しなくてはならぬ。

附 錄

自一九二四年支那各港貿易額 (純内外貿易額) (△印)

(單位千海關兩)

港 別	年 次	一、九二四年	一、九二五年	一、九二六年
愛 暹	△	三、五〇五	二、二八五	二、〇六九
哈爾濱屬關	△	五三、三〇二	五二、七九四	七六、八九一
龍 井	△	四、六四七	三、九三七	七、一六九
安 東	△	六五、六四九	八五、二五三	九三、一五七
大 連	△	二四〇、六七三	二七三、七一〇	三三二、〇七八
牛 莊	△	一四、八五八	二二、九六六	二五、八四五
計	△	四二四、六五八	四九八、五五七	五九二、一〇九
秦 皇 島	△	一七、六六三	一六、九八一	一五、四六五
天 津	△	二五一、六九六	二八七、七〇五	二七七、五七五
龍 口	△	一、八七一〇	一、六七八二	九、七四八
煙 臺	△	三三、〇七五	三三、四四八	三三、〇七五

長江沿岸諸港

鎮江	南京	蕪湖	九江	漢口	岳州	長沙	沙市	宜昌	萬縣	重慶	計	膠州
△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
一六〇三、二一三九	二七、七六三	三六、四六五	四〇、五一一	二八〇、五五〇	二二、九一八	三二、四七一	二二、六二七	一七、八七三	一四、七〇三	六五、五七五	二四〇、〇九一	一三二、二〇七
△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
一〇八、一六九〇	二八、五〇三	三八、一四二	六三、二〇五	二八八、七六一	二二、六一八	三一、八〇一	三一、〇八七	一〇、八〇九	一八、〇二七	六五、七〇六	二七二、二〇五	一二六、二五九
△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
一〇七、六二二	二九、二〇一	四〇、三八四	四九、五〇八	二八五、一一〇	一九、三九〇	三八、〇〇二	三一、七九二	一六、八二一	一四、三二五	七三、七五七	四七二、八一八	一三五、六九四

中支諸港

溫州	寧波	杭州	蘇州	上海	計
△	△	△	△	△	△
七六四、三六四	九、〇一七	四四、八七三	二二、五六二	一五、八五三	七五九、九二四
△	△	△	△	△	△
八五二、七八九	九、一四七	四六、九四六	二二、〇七二	一八、九〇二	七五八、〇七三
△	△	△	△	△	△
九六九、三九七	一〇、六六一	五〇、五六八	二九、九六二	二〇、〇一四	九五八、四五五

南支及西江諸港

拱北	九龍	廣州	汕頭	廈門	福州	三都澳	計
△	△	△	△	△	△	△	△
二二六、八九一	二七、三九八	七二、九六二	一三〇、七五五	三〇、九四七	一七、六四一	三、一三九	七六四、三六四
△	△	△	△	△	△	△	△
二二、四七〇	五〇、〇四四	四六、一四三	九〇、二六三	三〇、〇〇六	二〇、四一六	二、九七一	七四四、〇九四
△	△	△	△	△	△	△	△
〇〇、三九一	五五、五六六	一一、九七九	二六、四〇六	八五、八七三	二二、四七五	三、八七五	九六九、三九七

KANUKA TOKYO
店書堂南巖

NO

¥

250

CL

NO.

11088



